

レポート

認知症、車椅子利用者の 外出への支援

— Gondolaでの外出、
多職種・地域との協力—

地域包括ケアセンターいぶき 看護師
伊富貴めぐみ

良い看護・介護活動はその人(患者・利用者)一人ひとりを大切にすることが基盤になっている。また良い施設とは職員が大切にされ、各職種がそれぞれに必要な学習を行い、常に新しい情報に基づいた活動を行っているところではないかと思われる。

平成19年11月17日(土)、「老健分科会主催」の介護・看護研究発表会が開催され、8演題の発表があった。その内容は食事・排泄・睡眠に関するものが多く、どれも良い評価を得たが、その中で、ある日のこと、認知症の利用者が「どこへ行きたい？」の問いに「伊吹山」と答えた。その願いを叶えるために、職員や周囲の人たちの熱意から、ついに3合目まで到着できた過程が発表され、感動を与えてくれたので、ここに紹介する。先に記したように、良い施設とはこのような事実や出来事を着実に積み重ねていくことができる施設ではないだろうか。

社団法人地域医療振興協会 地域看護研究センター
伊藤正子

I. はじめに

当施設は、入所者定員60名で4つのユニットに分かれている。入所期間は3ヵ月で、在宅復帰を目指してリハビリを中心に生活している。施設内で生活しているからといって外出・外泊に制限があるわけではないが、「車椅子だから…」「落ち着きがないから…」といった理由でほとんどの利用者が外出していない。

中度の認知症の利用者が多い私のユニットささゆり。「どこへ行きたい？」の質問にある利用者が「伊吹山！」と答えた。その願いを叶えるために企画を立て、家族・関係者の協力を得て、伊吹山3合目に登ることができた。周囲からとても良い評価が得られたため、ここに報告したい。

II. 目的

外出をすること、外での食事(お弁当)をすることで気分転換をはかる。また、Gondolaから見える景色を楽しんでもらう。

III. 利用者紹介

平均介護度3.1、平均年齢89歳、男性5名、女性7名の計12名の利用者。車椅子利用者9名(常に利用6名、部分的に利用3名)、独歩3名。車椅子や椅子からの立ち上がり行為のある利用者、頻尿で待たがきかない利用者、大きな声で歌いだす利用者、ミキサー食の利用者など。

IV. 方法

- ① ユニット会議にて提案
- ② Gondola乗り場下見
- ③ 起案書作成
- ④ Gondola会社との連絡・調整
- ⑤ 家族宛に参加承諾を得る、参加者募集のチラシ作成
- ⑥ 参加人数決定
利用者12名、家族2組、スタッフ8名
- ⑦ 管理栄養士との調整(食事形態)
その日の昼食のメニューを食事形態そのままパックに詰める
- ⑧ 他職種への参加要請(Dr, OT, PT)
- ⑨ 当日のスタッフ行動表作成



伊吹山 標高1,377メートル

伊吹山全景



ゴンドラ入口の階段とゴンドラ



昼食事の様子(3合目のホテル内で)



伊吹山 3合目 到着記念

- ⑩ 当日出発前全体ミーティング
下見にて、利用者の安全確保に関して課題があり、スタッフ間で話し合う。
- ① 送迎車駐車場所が坂道…できる限り平坦な場所での停車を心がける。
 - ② ゴンドラ乗り場まで22段の階段あり(段差17センチ)…車椅子利用者は前後で抱えて上がる。短距離独歩の可能な利用者、独歩の利用者は付き添いのもとで上がる。
 - ③ ゴンドラの入り口の幅が50cm、段差33cm…ゴンドラ会社と連携し、乗車中はゴンドラ停止。車椅子利用者は前後で抱えて乗り込む。
 - ④ 見守り不可欠な利用者あり…ゴンドラ1台につき1名のスタッフが添乗する。
 - ⑤ 3合目のホテル内はトイレが和式のみ…出発前のトイレ誘導は必須。吸収量の多いパットにて対応する。

V. 結果

当日は、夜勤明けの職員、日勤職員、OT、Dr、利

用者家族も含め22名が参加した。

ゴンドラ乗車後は一気に3合目に到着した。ゴンドラ内から見渡せる琵琶湖や、眼下に見える自分の住む町、ケアセンターなどが一望できた。あいにくの曇り空で頂上は見ることができなかったが、3合目到着の記念に記念撮影をした。

3合目のホテル内では、ゴンドラ会社の計らいで予約席が設けられており、センターから持参のお弁当を食べた。スタッフも利用者と同じテーブルに座り、利用者と一緒に食事をした。家族と共に食事をする利用者もいた。「食べられないから…」と自分の分を分けようとする利用者、ミキサー食で他の食事をうらやましそうに眺める利用者もいて、スタッフ付き添いのもとで分けたり常食を切って食べたり、施設内ではできないことをした。家族と食事をする利用者は、家から持参されたお弁当をつまんだりしていた。黙々と食べる利用者もいたが、利用者はみんな表情も穏やかで、施設では椅子や車椅子からの立ち上がりが頻回な利用者も落ち着いて座り、頻尿の利用者も一

度もトイレの訴えもなく、トロミ付きの食事の利用者もトロミなしで摂取できた。

「3合目に来られたね」「綺麗な景色だね」「いつもは見上げていた伊吹山なのに今日は登って来たね」「ゴンドラに乗れるなんて…」「車椅子でも外に出ることができた」など喜びの声がたくさん聞かれた。また、施設ではゆっくりと座って利用者との時間が取れないが、職員も座ってなにげない、とりとめのない話をし、施設内では味わえない貴重で、有意義な時間を過ごすことができた。家族と共に同じ時間を過ごし、施設では見ることのない笑顔を見せる利用者もいた。ホテル内のお店で注文した大判焼も人数分で分けて食べ、残った分はジャンケンで争奪戦を行い、利用者の真剣な一面も見られ盛り上がった。参加した全員が、目的が達成された満足感でいっぱいだった。

参加した全員の利用者家族へは、3合目で撮影した集合写真を渡した。どの家族からも「ありがとう」「ゴンドラに乗れるなんて…」と喜んでいただけだ。

また、翌日には新聞の記事に掲載され、改めてやり遂げた満足感と、「車椅子の人をゴンドラに乗せたの?」「車椅子の人でも外出できるの?」「すごいな」「入所したい」といった周囲からの反応の声が聞かれた。新聞の記事を大きくコピーして利用者に見せると「私あっち向いてる」「写っていない」など興味津々で見入っていた。

VI. 考察

今回の外出は、ゴンドラ管理運営会社の協力、

家族の協力、職員の意気込みと協力、多職種の協力があってこそできた企画である。日野原¹⁾は、「やったあ」という達成感がものすごくポジティブに生きる気持ちを創ると言っている。認知症の方、施設を転々としている方、車椅子を使用している方にとって、外出すること自体が貴重な体験であり、わが町を見下ろすという経験ができたことは、喜びと自信が持てる思い出になったのではないかと考える。すべての参加者が、1つの目的のために1つになり、達成できたことは、スタッフにとっても大きな自信になったと思う。

地域との協力、多職種との協力があれば、できないことはないと確信した。

VII. 結論

外出は、利用者の気分転換をはかるとてもよい機会であり、とりわけ施設での外出は職員と利用者の気持ちを1つにしてくれる最高のチャンスである。

VIII. おわりに

今回の外出を通して、利用者も職員も活動的に、そして前向きになることと信じている。次の外出に向けて、合言葉は「やればできる」「なんとかなるさ」をモットーに。

文 献

- 1) 日野原重明: 新しい老人像を画いて—可能なことへの挑戦—。老健 全国老人保健施設協会機関紙 2007; 18 (9): 26-29.